

◆◆館蔵品紹介◆◆

橋上鍾馗図 橋本雅邦

1895年 絹本墨画淡彩 107.7×41.1cm

今回紹介する橋本雅邦(1835～1908)の「橋上鍾馗図」(以下、本作)は、画中に記された「行年六十一歳雅邦図」という落款により、明治28年(1895)すなわち雅邦数え61歳の時の作であることが分かる(図1)。61歳は現代だと還暦にあたり、「行年～」という落款は、この年を境にしばしば書かれるようになったという。

さて、鍾馗とは、疫鬼を退け、魔を除くという中国伝来の神のことである。鍾馗にまつわる説話には次のようなものがある。中国・唐の玄宗皇帝(685～762)が病に臥せていた際に大鬼が小鬼を捕まえて食べる夢を見た。大鬼は「自分はかつて科挙試験に落ちて自殺した者であるが、高祖皇帝が手厚く葬ってくれたため、その恩に報いるためにやってきた」と言った。その後、玄宗は回復したため、その姿を呉道子に描かせたという。鍾馗は通常、目が大きく、濃く長い顎鬚を生やした恐ろしい表情をしており、黒い冠をつけて長靴を履き、右手に剣を持つという姿で表されることが多い。日本ではすでに平安時代の「辟邪絵」(奈良国立博物館)の中に見られ、室町時代には雪舟(1420～1506)や祥啓(生没年不詳)などの画僧たちによって描かれてきた。江戸時代になると、狩野派や土佐派の絵師たちにも画題として選ばれ、さらには浮世絵の題材にもなった。また、鍾馗図は疱瘡除けとして端午の節句の際に絵や人形で表されことも多く、現代でもその風習は続いている。鍾馗信仰が発展していく中で、ヴァリエーション豊かな鍾馗図が、特に室町時代から江戸時代にかけて制作されていった。鍾馗図は、先述したような恐ろしい顔貌に、無背景に立ち姿の図が最も多く、そのほかにも鍾馗が左手で鬼を捕まえ右手で鬼の眼を抉るといったものや、鍾馗が虎に跨る「騎虎鍾馗図」などがよく知られている。

それでは、本作に改めて注目したい。右手に剣を持った鍾馗が橋の上に立ち、橋脚に掴まって身をひそめる小鬼をじっと見降ろしている。鍾馗は濃く長い顎鬚を生やし、黒い冠をつけて長靴を履くといった、一般的によく見られる鍾馗の姿をしている。画面右上には樹木が描かれ、さらに鍾馗の姿を際立たせるように、背景にもややとした霞を配し、幻想的な雰囲気を醸し出している。こうした霞



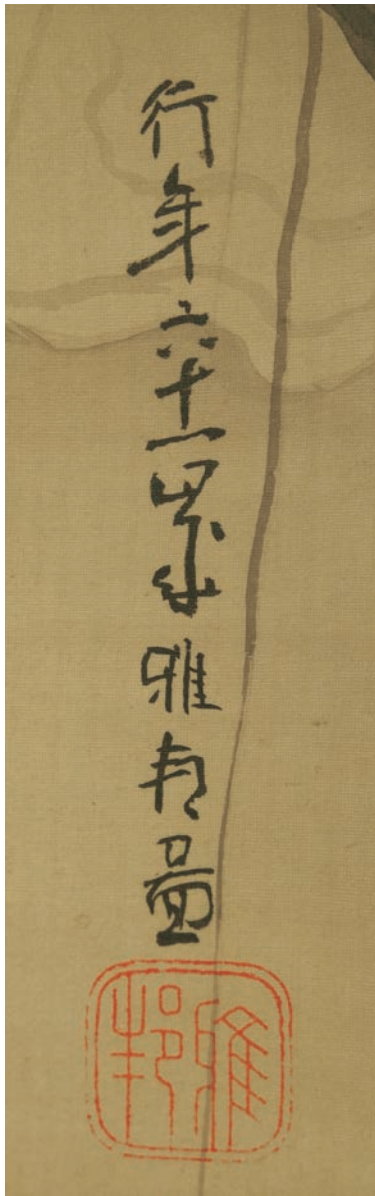


図1 落款印章

は、雅邦が明治30年(1897)頃に描いた「阿耨^{あのく}観音図」といった仏画にも見られる表現である。風が吹いているのであろうか、鍾馗の身にまとう衣が揺れている。全体として、薄い墨の輪郭線の上からさらに濃い墨の線が重なるようにひかれており、それによって特に鍾馗の顔部分は立体的に表されている(図2)。橋下の小鬼の部分にのみ、淡い朱色がほどこされている(図3)。小鬼は隠れているつもりであろうが、鍾馗は決して見逃さない。これから鍾馗が小鬼を退治する緊迫のシーンとも言えるが、雅邦の柔らかな筆致と水墨のぼかしによって表される空気感により、“恐ろしい鍾馗”というイメージが和らいでいる。なお、本作の外箱には雅邦の元で学んだ川合玉堂(1873～1957)による「橋上鍾馗図 雅邦先生筆」という箱書がある。また、箱内部からは雅邦の書状も見つかっている。右に翻刻を記す。



図2 鍾馗 顔部分



図3 橋下の小鬼

拝啓 過日ハ御懇切ナル御封書ニ接シ恐入候
 扱テ其節絹代トシテ金貳拾圓御送附相成確ニ落
 手仕候早速ニテ御返答申べき之處非常ニ落込居
 リ候為遅延致シ候段嚴重ニモ御侮恐奉願上候次
 ニ御依頼處付出来期限ノ處前に申上候通ニテ御
 承知ニ御座候ヘバ御受致シ置キ候、先ハ延引ナガ
 ラ御返事追申上置キ候也

頓首
 橋本雅邦

絹代として金20円を先に受け取っており、返事をしようとしたが落ち込むことがあり遅れてしまった、というようなことが記されている。文中に鍾馗図についての文言が見当たらないことから、この書状に記されている「絹代金20円」の作品が本作を指していると断定することはできない。ただ、封筒裏には「東京本郷龍岡町三三」「橋本雅邦」「丙甲十二月二十一日」と記されており、丙甲は明治29年(1896)を指し、本作が制作された翌年であることから、本作についての書状である可能性は高い。なお、封筒の宛名部分は切り取られているため、誰に宛てられた書状なのかも不明である。明治29年は、ちょうど雅邦が居住地を本郷区切通坂町51番地(現・文京区湯島2～3丁目)から、封筒裏に記した本郷区龍岡町33番地(現・文京区湯島4丁目)に移した年であった。雅邦は亡くなるまでこの地で過ごしている。

明治時代の鍾馗図と言えば、雅邦と同じ木挽町狩野家出身で盟友であった狩野芳崖(1828～88)の「柳下鍾馗図」(下関市立美術館)がよく知られているが、雅邦にとっても鍾馗はよく手掛けていた画題であった。雅邦の作画集や草稿集を見た限りでは、無背景で鍾馗が右手に剣を持って立つ単体の図が多いと言える(図4)。なかでも東京国立博物館本は、雅邦71歳の作で本作より後年のものであるが、右手で剣を持ち左手で衣の裾を掴む鍾馗図である(図5)。これは室町時代の画僧である周耕(生没年不詳)や、江戸中期の円山応挙(1733～95)、雅邦が学んだ木挽町狩野家の狩野養信(1796～1846)筆とされる「鍾馗図」にすでに見られる図様であり、広く流布していた鍾馗図であると言える。雅邦はその他にも、右手で剣を持ち、左手で小鬼の頭を掴みながら舌を出す恐ろしい顔貌の「鬼取鍾馗図」など特徴的な鍾馗図も描いている。

鍾馗が虎に跨る「騎虎鍾馗図」が室町時代には祥啓や芸愛(生没年不詳)、江戸時代から明治時代にかけては狩野探幽(1602～74)や佐竹曙山(1748～85)、河鍋曉斎(1831～89)と多くの絵師によって描き継がれていったのに対し、本作のような「橋上鍾馗図」はさほど多くはない。そもそも、“橋の上の鍾馗”という図様はどこから来ているのであろうか。大正14年(1925)刊行の斎藤隆三著『画題辞典』(博文館)には、「鍾馗」の項目に次のようなことが記されている。

歴代名公画譜にある戴文進の鍾馗は驢馬に
乗れて橋上にあり、従者荷を肩にして之に従ひ、
荷の中には手足を括りし鬼もあるといふもの、
狩野家にて屢々此図を取りたり。



図4 橋本雅邦「鍾馗」

出典：橋本雅邦 画『雅邦草稿集』南陽堂、大正9年(1920)

国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1014715>



図5 橋本雅邦「鍾馗図」明治38年(1905)

東京国立博物館蔵

出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

『歴代名公画譜』とは、1604年に中国杭州の画家・顧炳^{こへい}によって出版された『顧氏画譜』(六朝から明代にいたる著名な画家106人の作品を伝記とともに掲載したもの)を、寛政10年(1798)に谷文晁^{こぶんしん}(1763～1841)が複製出版したものである。『顧氏画譜』はいつ頃日本に将来されたのか分かっておらず、貴重本であったため、文晁も写してから出版にこぎつけるまで十数年かかったようである。『画題辞典』の通りに『歴代名公画譜』の戴文進の項目を見ると、驢馬に乗った人物が石橋を渡り、その隣の従者が手足を縛った小鬼を担ぐ図が掲載されていることが分かる(図6)。驢馬に乗った人物は右手に剣らしきものを持っているため、おそらく鍾馗なのだろう。ただ、よく見られるような恐ろしい表情をしておらず、一見鍾馗には見えない。また、従者がおり、その人物が小鬼を捕まえているというのも珍しい図様である。本作と共通しているのは“橋の上の鍾馗”という点のみである。『画題辞典』には「狩野家にて屢々此図を取りたり」と記されているが、現段階では(図6)のような鍾馗図を見つけられていない。ただ、先述したように、「橋上鍾馗図」はさほど多くはないものの、いくつか見られる。例えば、東京国立博物館には狩野探幽の鍾馗図の模本がいくつか所蔵されているが、その内の「圯上鍾馗図」は右手に剣を持って橋の上に立つ鍾馗図である(図7)。

一方で、『歴代名公画譜』の鍾馗図や探幽の「圯上鍾馗図」には、本作に見られるような“橋脚に掴まる小鬼”が描かれていない。そこで次に注目したのは、上方の浮世絵師・大森善清(生没年不詳、作画期:1702年～16年)が元禄15年(1702)に刊行した『あやね竹』という絵本に掲載された鍾馗図である(図8)。そこには、右手に剣を持って獅子に跨った鍾馗が橋上におり、橋下には“橋脚に掴まる小鬼”が描かれている。『あやね竹』は、中国の古典画題24図からなる折帖仕立ての絵本で、善清の絵本の特徴である唐団扇型の枠を伴う初期のものから、(図8)の大英博物館本のような後摺りのものまで現存している。『あやね竹』の序文には、善清が絵馬を参考にして描いたというようなことが記されているが、この序文は善清の他の絵本にも掲載されているため、結局善清が何を参考にして中国画題の絵を描いたのか、定かではない。ただ、『あやね竹』を含む善清の絵本は上方を中心に流布し、19世紀前半まで刊行されていたことが指摘されている。鍾馗図は、江戸時代においてはあらゆる画派によって制作されていたことから、様々な鍾馗の図様が画派を超えて受け継がれ、時には融合しながら発展していったとも考えられよう。昭和13年(1938)に刊行された大阪市立美術館編『名宝展覧会図

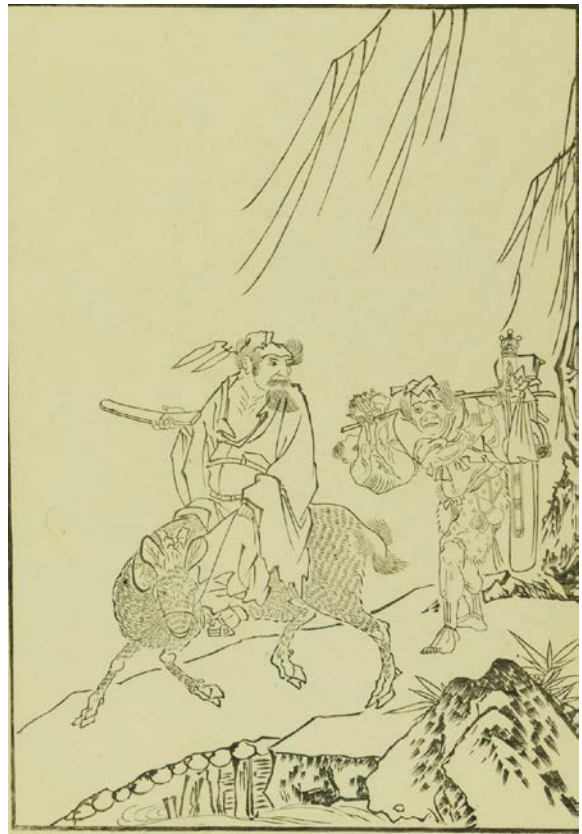


図6 谷文晁『歴代名公画譜』寛政10年 大英博物館蔵
© The Trustees of the British Museum



図7 古閑「狩野探幽 圯上鍾馗図」模本 東京国立博物館蔵
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



図8 大森善清『あやね竹』のうち「鍾馗」 元禄15年
大英博物館蔵
© The Trustees of the British Museum

録』第3回に、谷文晁筆とされる「鍾馗像」が掲載されているが、明らかに「橋上鍾馗図」であり、さらに、画面右下に小さくはあるが“橋脚に掴まる小鬼”が描かれている。

以上のことから、“橋の上の鍾馗”“橋脚に掴まる小鬼”という組み合わせの鍾馗図は、現段階では『あやね竹』が刊行された元禄15年には見られることが分かった。そこに室町時代以来の“右手に剣を持って立つ鍾馗”が融合し、本作のような鍾馗図が生み出されていったとも考えられる。このように、雅邦は古法に則った鍾馗図を描いていたと言える。

雅邦は、『國華』（明治22年(1889)12月号）に寄稿した「木挽町画所」において、狩野派の教育方針である粉本主義の弊害を説く一方で、「用筆が巧みになる」という点を評価している。雅邦が教鞭を取った東京美術学校では、絵画教育の一つとして所蔵する粉本の臨模が行われており、狩野派の教育方針は明治の世になっても継承されていた。雅邦はフェノロサの指導の元、西洋絵画の技法を取り入れた新しい絵画—「日本画」を作り上げていく一方で、また、狩野派としての自身を強く自覚していたのだろう。それは、古い時代の図様を踏襲した「鍾馗図」を制作し続けていたことから窺える。

昭和3年(1928)の『裳久論具 足利市田村家所藏品入札 昭和三年三月廿七日廿八日下見同廿九日入札並ニ開札』（東京美術倶楽部）には、「行年六十三歳」の落款がある雅邦の「橋渡鍾馗」という作品が掲載されている。明治36年(1903)に雅邦の門下生らが発足した研究団体である二葉会に出品されたものである。橋の上の鍾馗、橋脚に掴まる小鬼、背景の樹木などが本作と近似しているが、本作よりも橋下の小鬼を見る鍾馗の動きに躍動感が増しており、これから小鬼を退治する展開を予期させるものとなっている。『あやね竹』の鍾馗(図8

参照)や昭和13年の『名宝展覧会図録』に掲載された谷文晁の鍾馗は橋下の小鬼を見てはいないが、この二葉会出品の「橋渡鍾馗図」や本作では、鍾馗は小鬼に視線をやり、狙いを定めている様子が伝わってくる。本作は伝統的な鍾馗の図様を踏まえながらもそれに留まらず、“鍾馗の物語”を表現することに重点を置いた、雅邦の鍾馗図の中でも独自性の高い作品であると言える。

参考文献

- 展覧会図録『特別展 橋本雅邦—その人と芸術—』山種美術館、1990年
- 河野元昭「文晁の中国画学習—『顧氏画譜』と『漂客奇賞図』」『國華』第1273号、國華社、2001年
- 浅野秀剛「京の絵師、大森善清」『菱川師宣と浮世絵の黎明』東京大学出版会、2008年
- 浅野秀剛「『あやね竹』を描いた絵本画家・大森善清」『季刊美のたより』No.166、大和文華館、2009年
- 展覧会図録『没後100年橋本雅邦』川越市立美術館、2008年
- 展覧会図録『特別展狩野派と橋本雅邦—そして、近代絵画へ』埼玉県立歴史と民俗の博物館、2013年
- 永田真紀「騎虎鍾馗の図像の伝承と変容」島尾新、彬子女王、亀田和子編『写しの力—創造と継承のマトリクス』思文閣出版、2013年
- 田中純一郎「橋本雅邦と二葉会—成立から終焉まで—」『哲学会誌』第47号、学習院大学哲学会、2023年5月

(柳澤 恵理子)

「水滴形茶入 銘 独尊」について

依田 徹

はじめに

遠山記念館で所蔵する「水滴形茶入 銘 独尊」(図1)は、平成24年(2012)に当館2代目理事長である遠山一行から寄贈された作品の内の1点である。このため平成2年刊行の『遠山記念館所蔵品目録1』に掲載されておらず、これまで注目される機会もなかった。しかし柳沢保光^{やなぎさわやすみつ}(堯山^{ぎょうざん})が箱書付けし、根津嘉一郎(青山)が所持したという、興味深い来歴を持っている。さらに今回、幕末には江戸の豪商である仙波太郎兵衛(玄誠斎宗意)が茶会で使用している記録を発見した。本稿では備前茶入としての本作の位置づけを考えた上で、この間の時系列を整理しながら紹介したい。

1 「水滴形茶入 銘 独尊」

まず本作について確認したい。本作の大きな特徴は、何よりも備前焼の茶入という点である。備前焼は岡山県備前市周辺で焼かれる陶器であり、鎌倉時代から稼働していた窯業地として「六古窯」の一つに数えられている。備前焼は釉薬を用いない焼き締め陶器であり、古くより壺や甕などをはじめとする生活用品を焼いていた。戦国時代になると茶道具の生産がはじまるが、当初は建水や水指などの脇役が多く、桃山時代に新機軸として生産されるようになったのが茶入である。抹茶を入れる茶入は茶席において最も尊ばれる道具であり、古くは中国で生産された施釉陶器の小壺を転用し、中世の日本では愛知県瀬戸窯のみが模倣生産する技術を持っていた。このように施釉陶器として発達した茶入全体において、無施釉である備前焼は例外的な位置付けとなる。

本作は高さ8.3cm、弦を含む胴幅は8.9cm、口径4.3cm、底径5.7cmと、茶入としてはやや大振りの作品となる。白い良質な胎土を用いて全体的に厚手に成形されており、膨らみを持つ腰から上方に向かってすぼませ、口縁部には捻り返しをつけている。この捻り返し^{ひね}の一部を尖らせて注ぎ口とし、さらに反対側には紐状の粘土を曲げた弦状の持ち手を付けている。茶入の一種に文房具の一種である水滴を転用した水滴形茶入があり、本作の形状はこれを模したものとなる。本来は中国製の薄造りの陶磁器であった水滴を、無骨な備前焼で模した所に面白味があると言えるだろう。さらに本作では、胴には篋を用いて縦



図1 「水滴形茶入 銘 独尊」遠山記念館蔵



図2 同 底部

方向の削り目を入れており、その断面が涙滴のような形となっている。底部は糸切りのない板起こしであり、胎土に自然釉がかかって景色となっている(図2)。

本作は焼成過程で、窯中の灰が注ぎ口の方向から降

りかかっている。この厚くかかった灰は細かくひび割れて白色を呈しており、備前焼の中でも「^{えのきはだ}榎肌」と称される一群に分類される。その反対側は火の当たり加減で、白い胎土が一部艶のある赤色へと色変わりを見せている。こうした変化の激しい焼き上がりは、陶工がある程度操作して生み出したものだろう。さらに水滴形の削り目の下方には、灰をかけないようにして素地を露出させる「ヌケ」を丸く作っており、ここにも製作者による強い作為が見て取れる。

先述した通り、備前焼の製品として茶入は少ない。天正15年(1587)に千利休(1522～1591)が備前焼の茶入を使用した際、白地金襴の豪華な袋を仕立てて用い、袋の方に価値があるという諧謔から「布袋」という銘を付けたことが、『神屋宗湛日記』に記録されている。当時の日本製の茶入と言えば、鉄釉を用いて唐物茶入を模造した瀬戸焼(愛知県)の製品であり、備前焼の茶入を用いるという行為そのものが型破りなものであった。この茶入は「備前肩衝茶入 銘 布袋」(図3)として表千家不審菴が所蔵しているが、白い胎土を露出させながら、藁を巻き付けた部分を赤く変色させる火^ひ櫛^{だすき}という加飾がほどこされている。

また古田織部(1544～1615)が所持したという伝来の「備前肩衝茶入 銘 さび助」(図4)がある。こちらも肩衝形であるが、形にやや歪みを加え、窯の中で自然釉が掛かった、変化の激しい作品となっている。総じて備前焼の名物茶入と言えば、両者を代表格とする。この2点をはじめ、備前焼は肩衝タイプが多く、本作のような水滴形はさらに珍しい。特に本作のように縦方向に大きな窺目を入れる造形感覚は、古田織部の時代とも異なっている。

2 柳沢堯山について

本作には内箱蓋表に「独尊」(図5)、蓋裏に「天上天下唯有」(図6)という墨書が入っている。言うまでもなく、釈迦が誕生時に「天上天下唯我独尊」と述べたという仏伝に由来するが、「我」ではなく「有」としている点が珍しい。この墨書については明確な証拠はないものの、堯山公の筆と伝承されてきた。この「堯山」という号は、一般に大和郡山藩(奈良県大和郡山市)の3代藩主である、柳沢保光(堯山、1753～1817)のものとして知られる。柳沢家は5代将軍徳川綱吉の側用人として権勢を揮った柳沢吉保を祖とし、甲府藩を経て大和郡山藩に封じられていた。吉保の曾孫にあたる保光は、大名茶人として知られる松平治郷(不昧、1751～1818)と同世代の大名であり、いわゆる化政文化の担い手の一人となる。

保光は和歌を日野資枝^{すけき}に学び、書家としては御家流を得意とし、茶の湯は石州流の片桐宗幽(一法庵)に師事

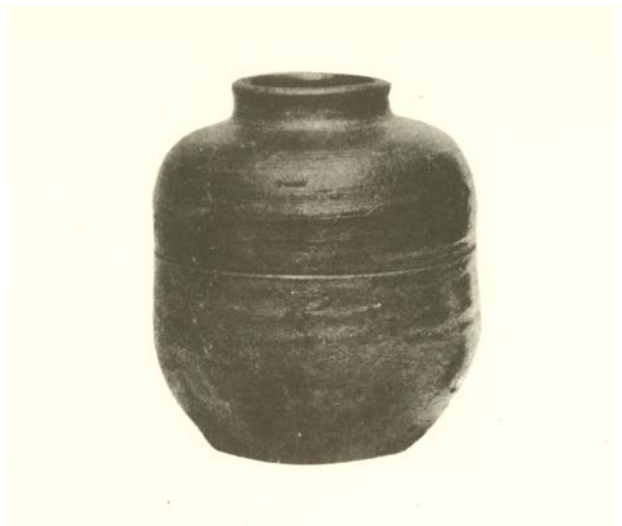


図3 「備前肩衝茶入 銘 布袋」表千家不審菴蔵
(『大正名器鑑 巻五下』より転載)



図4 「備前肩衝茶入 銘 さび助」
(『大正名器鑑 巻五下』より転載)

していた。不昧とも交流を持っていたとされるが、不昧の「獨樂菴」に合わせるように、保光は「獄樂庵」と号している。そして窯業にも高い関心を持っており、大和郡山藩領の五条村で焼かれていた雲華焼の復興を試み、寛政元年(1789)には赤膚山^{あかはだ}に開窯させ、この流れが現在に続く赤膚焼へと至っている。

このように見ると、本作も保光が備前窯に発注した注文制作という可能性も想定される。しかし江戸時代には備前焼は薄造りの端正な作行へと移行したとされ、本作を江戸中期に当てはめるのは難しい。このため保光は、当時骨董として流通していた本作を取り上げ、銘を付けたと見るべきだろう。また本作に付属する袋3点(図7)の内、白地牡丹紋金襴^{おうさか}と逢坂金襴を片身替りとした1点は、名

物裂2種を用いた特殊なものであり、これも箱と同時に保光が仕立てた可能性が高い。現在の内箱は茶入本体と袋1点のみを入れる眼鏡箱と呼ばれる形であり、これが保光の仕立てた状態となるだろう。

本作にはその後の所有者がさらに白い緞子と藍色の間道の袋2点を加え、これら全体を杉材の外箱に納めている。

3 仙波太郎兵衛の所持について

本作には昭和18年(1943)の根津美術館蔵品入札会の札(図8)が付属しており、この時点までは根津美術館にあり、戦時下に流出した事が確認できる。これまでその間の来歴については不詳であったが、愛媛大学図書館の所蔵する『会記』に次の記述が見つかった。

一茶入 備前手瓶／堯山公箱書／銘 獨尊
袋 古金襴二重蔓大牡丹／逢坂片身替り

付属品等の一致から本作と判断され、保光の没後半世紀を経ない時期から箱書付が堯山筆として伝承されていた事実も確認できる。

この『会記』は「玄心斎」と号する茶人の記録であり、安政年間の江戸の茶会を中心に収録している。そして上記の引用は、安政5年(1858)の仙波太郎兵衛の口切り茶会の記録となる。

仙波太郎兵衛は江戸市中の運送業を請け負っていた牛飼いをルーツとする豪商で、江戸時代後期には両替商へと転身し、江戸五人衆などと呼ばれて幕府御用達を務めていた。特に5代仙波太郎兵衛(?~1887)は、裏千家11代家元である玄々斎の有力な後援者であり、「玄誠斎宗意」という号を持っていた。これまで仙波宗意の確かな茶会記は確認されていなかったが、この『会記』には計10会が記録され、これぞ豪商という名品を並べる茶会を行っている様子が確認できた。本作は、この仙波家の所蔵品だったのである。

宗意の生年は不詳であるが、明治20年に死去したことは判明しており、保光没後の生まれと推定される。本作は保光在世時に柳沢家にあり、その没後に江戸の豪商へと流れたのであろうか。

続いて仙波家の所蔵品がどのように分散したのかを見てみたい。仙波家は大正5年(1916)に売立を行っているが、その記録である『元幕府御用達仙波家並二橋本家等ノ旧御蔵品入札』には、本作に該当する作品は掲載されていない。この大正5年までの間に、仙波家が本作を手放していたことになる。



図5 箱蓋表墨書



図6 箱蓋裏墨書



図7 袋

明治維新後、宗意は御三卿田安家の当主であり、江戸城開城に尽力した徳川慶頼(玄黙、1828~1876)の邸宅に出入りし、その茶友として余生を過ごしていた。しかし明治9年には慶頼が、翌10年には玄々斎が死去し、宗意は東京における裏千家の長老のような立場になっていく。

そして明治16年4月には、宗意が小松宮彰仁親王(晩翠、1846～1903)に名物茶入「唐物耳付」を譲渡したことが、高橋義雄『大正名器鑑』から確認できる。近代化への適応に失敗した江戸豪商が、明治期に衰微していく過程と捉えるべきだろう。しかしこうした道具の譲渡も関与してか、宗意とその妻である宗心は小松宮家と北白川宮家に出稽古を行うようになる。そして宗意の没後も、宗心から小松宮家へと道具が移動していった。関東大震災によって焼失した美術品を記録した『罹災美術品目録』を見ると、小松宮家の所蔵品として記載されている197点の内、実に51点が仙波家の旧蔵品となる。その中には古田織部箱の「御所丸茶碗」をはじめ、「黄瀬戸伯庵茶碗」、「仁清長茶入 鷺の森」などの名品が見られる。仙波家の所蔵品の主要な茶道具は小松宮家へと移動し、関東大震災で焼失したと位置付けられる。

また明治10年代には、宗意は益田孝(鈍翁、1848～1938)にも茶道具を譲渡している。益田は三井物産と日経新聞社の創業者として知られ、近代東京茶道界の中心人物として活躍した人物でもある。この宗意と益田の関係については、益田と交流のあった松永安左エ門(耳庵、1875～1971)が、『茶道春秋』に次のように記している。

『安田松翁茶会記』に明治十四年十一月六日、その翌十五年三月二十六日に(鈍翁が)茶会を催された会記があるが、その頃は江戸十人衆の一人仙波太郎兵衛がいい道具を持っていたので、鈍翁は人を介してその道具を買われたので一日仙波が「斯様に道具を買われるなら一度拙者をお呼びなさい」といったので、御殿山禅居庵続きの二畳台目のような小間で仙波を招いたのが翁の茶の最初であるらしい。時はちょうど松翁茶会記の明治十四年の頃で、その時分の世話は万事克徳君で、鈍翁は全くロボット亭主であつたらしい。

このように、宗意は小松宮家のみならず、東京の数寄者に道具を譲渡していたことになる。

では本作は、宗意から根津家に直接譲渡されたのだろうか。東武鉄道の経営者である根津嘉一郎(青山、1860～1940)は、現在根津美術館に所蔵されるコレクションにより、コレクターならびに茶人として知られている。しかしその蒐集の大きな転換点となった東山御物「花白河蒔絵硯箱」の入手は、明治39年の第3回平瀬家売立においてである。その後、東京の数寄者たちに勧誘され、初陣茶会を催したのが大正7年のことであった。宗心が死去したのが明治34年、仙波家の売立が大正5年であ

ることを考えれば、仙波家と根津家の間に、もう一人所有者が入るのが自然となる。あるいは本作を、益田が仙波家から買い取った作品の一つと見ることも可能であるが、現在の箱には益田の所有を示す「碧雲台」等の蔵印は捺されていないため、その可能性は低い。本作は、明治期の道具移動の複雑さを示す典型例とさえ言えるだろう。

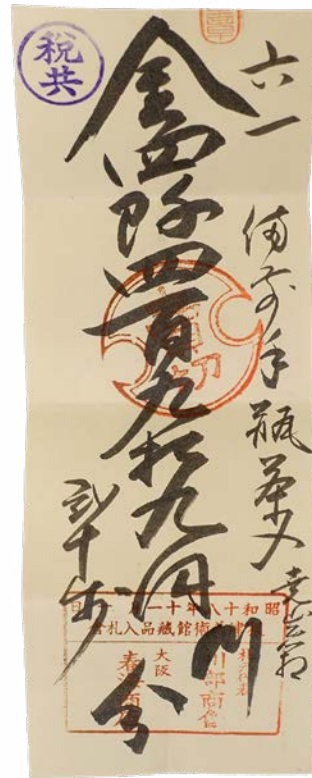


図8 入札会の札

主要参考文献

- 高橋義雄『大正名器鑑 第五編下』大正名器鑑編集所1923
- 『罹災美術品目録』國華社、1933
- 『大和郡山市史 本編』大和郡山市、1966
- 『松永安左エ門著作集』第5巻、五月社、1983
- 依田徹「江戸豪商仙波家と仙波宗意について」『茶の湯文化学』27、2017
- 依田徹「近代皇族茶人としての小松宮彰仁親王一道具蒐集と裏千家との関係から」『茶の湯文化学』43、2025

テーマ展「近代の「日本画」

—橋本雅邦から横山大観まで—

3月20日（木・祝）～5月18日（日）

当館所蔵の橋本雅邦作品(11点)を一挙公開! 横山大観、菱田春草、上村松園、速水御舟らの名品揃い!

明治維新とともに江戸幕府の御用絵師であった狩野派の絵師たちは職を失い、絵画は学校で教授されるようになりました。明治のはじめのころは洋画の習得が優先されましたが、明治20年(1887)に設立された東京美術学校(現・東京藝術大学美術学部)では旧狩野派の橋本雅邦(1835～1908)が教鞭をとり、その門下から、横山大観(1868～1958)や菱田春草(1874～1911)らが育ちます。西洋絵画の影響を受けた彼らの作品は、後に「日本画」と呼ばれるようになります。本展では近代の「日本画」が生み出されていく過程を、狩野派の作品から橋本雅邦作品を中心に辿っていきます。当館が所蔵する「日本画」の精鋭をご覧ください。また、「日本画」に対する「洋画」の作品として、日本近代洋画の父・黒田清輝(1866～1924)の初期作「裸婦習作」も特別展示いたします。



橋本雅邦「美人琴棋書画図」 1885年頃



橋本雅邦「雪中金閣寺図」
1899年



菱田春草「躑躅」
1905年



上村松園「むしの音」
1914～1915年頃



速水御舟「牡丹」 1926年



横山大観「耀八絃」 1942年

・特別講座「橋本雅邦と「日本画」」

4月26日(土) 午後1:30～3:00 講師 依田徹(当館学芸課長)

会場：遠山記念館事務棟地下会議室 対面式(Zoom参加も可能) 定員：30名(先着)

参加費：500円(入館料別途) お申込み方法：当館公式サイト申込みコーナーから

コレクション展 1

5月31日(土)～9月21日(日)



2025年の大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」の放送に合わせ、喜多川歌麿の貴重な肉筆画である「美人夏姿図」をはじめ、江戸時代中期の絵画を中心に展示します。また、コレクションの中から、染付などの陶磁器や帷子類など、夏にふさわしい作品を選んで紹介します。



染付水玉文皿 景德鎮窯
明時代末期～清時代初期 17世紀



薄紅麻地蘆に千鳥蛇籠模様帷子
江戸時代後期 19世紀
(展示期間7月30日～9月21日)

喜多川歌麿「美人夏姿図」
江戸時代中期 18世紀
(展示期間5月31日～7月27日)

特別展「中国絵画への憧憬 —楊文驄「江山孤亭図」と江戸時代の文人たち—

10月4日(土)～11月16日(日)

明王朝の遺臣として清王朝と最期まで戦った楊文驄(1597～1646)は、南宗画の名手でもありました。文驄は高潔な人物として、日本の文人達たちから尊敬される存在となりました。遠山記念館で所蔵する楊文驄「江山孤亭図」は、文人画家である山本梅逸(1783～1856)が家財を売却して入手し、これを出迎える際に頼山陽(178～1832)が袴を付けたという逸話で知られます。本展ではこの「江山孤亭図」をはじめとする日本国内の文驄の作品を集めるとともに、文驄を敬慕した梅逸、山陽らの作品を並べ、この近世文人画史の一面を浮かび上がらせることを試みます。(会期中一部展示替えがあります)



楊文驄「江山孤亭図」(図左) 1643年
山本梅逸「青緑桃源図」(図右) 1839年

●遠山家端午の節句飾り

4月23日(水)～ 5月11(日)

遠山元一が長男一行(大正11年生まれ)の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾りと同様、旧遠山邸の中棟大広間の次の間に飾られます。その中には、人間国宝の二代平田郷陽や京都の大本平蔵など名工の作品も含まれ、鎧冑飾りに、上段から鍾馗、神武天皇、日本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清正など勇猛な姿の人形や飾り馬、また金太郎など愛らしい人形が並びます。



●遠山邸2階

春の公開日

日時：4月19日(土)

5月10日(土)

午前11:00～午後3:00

参加費：無料(入館料別途)



●ご来館のみなさまへ●

感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・倦怠感、発熱、咳等の自覚症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・アルコール消毒にご協力をおねがいします。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利 用 案 内

◇入館料

	一 般	学 生
特別展	1,000円	800円
通 常	800円	600円
美術館閉館時	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引

◇開 館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)
及び4月22日(火)、5月7日(水)、5月13日(火)、
7月29日(火)

◇邸宅、庭園のみ公開(展示替期間)

5月20日(火)～ 5月30日(金)

9月23日(火)～10月 3日(金)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
- 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅～桶川駅」間の東武バスで
牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第68号 2025年3月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館
編集担当 久保木 彰一

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951